国語（その一）

第一問

次の文章を読んで、後の問に答えなさい。

近代社会で宗教の絶対的権威が相対化され、道徳的な「正しさ」が市場原理によって決定されるようになっていった。各人の「自由」を確保しながら、その中で「客観的」と見なされる価値基準を立ち上げる社会システムが、ひとつの「思想」として構想されたのです。人々に富の魔法をかけて「騙す」ことによって達成される資本主義社会は、経済的な「発展」をもたらす一方で、さまざまな問題を生み出しました。その問題のひとつひとつを検討するのは本書の目的を離れますが、社会全体で「大きな物語」を共有し、道徳的な「正しさ」の基準を市場原理とは別に設定しようとする「教養主義」の試みは、歴史的にみると、資本主義社会が生み出した問題を乗り越える方法として示されたものとして位置づけられます。

一定の「教養」を身につけて理想の人格を形成することこそが人間にとって最も美しい生き方だと考える教養主義の「価値」を支える存在は「天才」でした。天賦の才によるとしか考えられないような素晴らしい作品を鑑賞することが、感性に基づく「正しい」判断の基礎になるとみなされたのです。

しかし、A「天才」とは何でしょう。「神作品」という言葉が乱発される以前、天才が神聖視された時代がありました。日本では、夏目漱石、森鷗外などがその「天才」にあたります。彼らの才能を称賛し、その作品を社会全体で共有することによって、社会全体で通用する価値判断の基準を設定しようとしたのです。ここでの天才もまた、文字通りの意味での「神」ではありません。(注1) サブカルチャーが提供する「神聖性」と同様に、天才が担う「神聖性」も神ならぬ人間の業によるものでした。「尊さ」の感情を人々に抱かせるような「神聖性」をもつ天才は、あくまでも人間としてその役割を担ったのです。サブカルチャーの「神」とは異なり、教養主義の「天才」は「大きな物語」の共有によって鑑賞者の「私」を矯正する機能をもちましたが、神ならぬ人間が「神聖性」を帯びる点では同じ役割を果たしているようにも思えます。

では、B教養主義の発展の中で「天才」と見なされた人々の「偉大さ」は何に由来していたのでしょうか。

教養主義の「感性」を支えたのは、ロマン主義という芸術運動でした。その芸術運動の中に「オリジナリティ」という近代美学の基本概念の源泉を見出すことができます。

「オリジナリティ」は、芸術作品の芸術性を支えるものだと理解されます。誰かの作品を真似た作品は、少なくとも(注2) ハイカルチャーの文脈では、Cいまだに「コピー」

国語（その二）

として一顧だにされません。コピーの方がずっと完成度が高く、元の作品のコンセプトをより明確に具現化している場合でも、「コピー」であるというだけで価値のないものと見なされます。つまり、オリジナルの価値は、作品が芸術であることを保証するものになっているのです。

しかし、「オリジナリティ」は、なぜそうした「価値」をもっていると見なされるのでしょう。考えてみると不思議なことです。というのも、広い歴史的な視野で見ると、芸術作品の価値は長らく「完璧に模倣できていること」に求められていたからです。そこで言われる「模倣」とは、神が定めた物事の理念としての「　イ　」の模倣だったのですが、世界の物事の真の姿を可能な限り正確に写し取るということが、芸術作品の価値を保証していたのです。その背景には、真の意味で物事を創造できるのは神だけであるという考え方がありました。「オリジナリティ」とはその意味で「神」にだけ認められるものであり、人間がもちうるものとは見なされなかったのです。

ではなぜ、人間が「オリジナリティ」をもつと考えられるようになったのでしょうか。初期ロマン主義の作家であるシュレーゲル兄弟にその起源がみられます。

シュレーゲル兄弟は「自然の模倣」という旧来の芸術観を前提にしつつ、人間がもちうるものとして「オリジナリティ」を示しました。少し分かりづらいものですが、兄のアウグスト・ヴィルヘルム・シュレーゲル（一七六七―一八四五年）の文章を見てみましょう。

> D 自然を生まれたものとしてではなく生むものそれ自体として理解するなら、［…］芸術は自然を模倣すべきであるという原則は反論の余地がなく、また欠点もない。

シュレーゲルはこうしてまずは「自然の模倣」という伝統的な芸術観を共有するところからはじめます。「自然を模倣すべきであるという原則は反論の余地がない」といわれる通りです。しかし同時に、「……なら」と条件を付けることで、シュレーゲルは「自然の模倣」という言葉の意味を変えようとしています。「自然を生まれたものとしてではなく生むものそれ自体として理解するなら」というのが、その条件です。

「自然（nature）」という言葉は「生む（naturo）」というラテン語に由来しますが、自然という言葉を「生む」という動詞の過去分詞（＝「生まれたもの（naturata）」）としてではなく、現在分詞（＝「生むもの（naturans）」）として理解することを、ここでシュレーゲルは提案しています。こうした「自然」概念の読み替えは、実際のところ、必

国語（その三）

ずしもシュレーゲルの「オリジナル」ではないのですが（ルネサンス期のジョルダーノ・ブルーノ（一五四八―一六〇〇年）の思想にその源泉を辿ることができます）、「芸術」という概念の転回という点ではきわめて特異な役割を果たしました。シュレーゲルにおいてその「自然」の読み替えは、「オリジナリティ」を人の手に帰するという重要な役割を果たしたのです。

自然を「生まれたもの」と見なす考え方は、その「自然＝生まれたもの」を「生む者」として「神」を想定しています。「神」が世界をそのようなものとして作ったのであり、私たちはその自然の中に生きているというわけです。しかし、自然を「生まれたもの」ではなく「生むもの」と考えることは「自然」の中に産出能力を見出すことを意味します。その産出能力に「神」がどのように関わるかは別にして、「自然」そのものに新しいものを生み出す能力が備わっていると考える点で、シュレーゲルの条件は非常に大きな考え方の転換を迫るものになっていることが分かるでしょう。新しい何かを生み出す「オリジナリティ」が「自然」のうちに宿っているという考え方が、そこには示されているのです。

X

では、その「生む力」は、どうすれば引き出されるのでしょうか。興味深いことにシュレーゲルは、その力の源泉を芸術家の「内面」に求めました。「芸術家にとって師たる創造的自然は外的現象のうちには含まれていないのだから、芸術家は創造的自然からどこに忠告を見出すべきか。芸術家はそれを自己自身の内面のうちに、自己の存在の中心点のうちに、精神的直観を通して見出しうるだけであり、それ以外のところに見出すことはできない」。人間も「自然」の一部である以上、芸術家の「内面」に「生む力」が宿るというのは理解できます。

しかし、人間の外にある「自然」には、なぜその力が見出されないのでしょうか。ここでシュレーゲルがほぼ何の理由づけもなく、外の「自然」には生む力がないと断定しているのは、近代における「オリジナリティ」の成り立ちを考える上で興味深い点だと思います。近代的な世界観を前提にしてシュレーゲルの言葉を聞く限りでは何の違和感も覚えないかもしれませんが、シュレーゲルが「自然」というものを、「個人」の枠組みで「内」と「外」に分けられると当然のように言うことができたからには、この時代においてすでに、個々の「私」の独立性が確立していたはずです。

ともあれ、芸術家が「偉大」だと見なされるのは、彼が人間でありながら「神」に比される「オリジナリティ」をその「内面」にもつからだとされていることが分かりまし

国語（その四）

た。芸術家の苦悩や葛藤もまたその限りで、神ならぬ人間の限界を示すのではなく、彼の「内面」の深さを示すものとされます。「内面」の深さと見なされるものが、作品の創造性を保証すると考えられているのです。作られた作品の背後にある「内面」に価値の源泉があるのなら、出来上がったものを形だけ真似たものに創造性が欠けていると見なされるのは当然でしょう。

コピーを作る人間は、どれだけ技術をもっていたとしても、単に「生まれた自然」を模倣するだけで「生む力」には触れていないと見なされます。芸術作品が芸術作品であるためには、そこに生み出す自然の力の痕跡がなければなりません。そこでは「オリジナルであること」が、自然の生む力を証明するものになっているのです。こうした考え方が今日「芸術」と称されるものがもつ魔法の源泉になっています。

（荒谷大輔（すけ）『使える哲学　私たちを駆り立てる五つの欲望はどこから来たのか』による）

（注1）サブカルチャー　――　若者など、その社会の特定の集団を担い手とする独特な文化のこと。

（注2）ハイカルチャー　――　人類が生んだ文化のうち、その社会において高い達成度を示していると位置づけられる文化のこと。

※　問題作成上の都合で、原文の一部に手を加えてあります。

問一　傍線部A「『天才』とは何でしょう」とあるが、天才とはどのような人のことであるのか。その説明を行った次の文の空欄に入れるのに最も適切なものを、本文中から二十六字で抜き出して答えなさい。

天才とは［　　］人のことである。

問二　傍線部B「教養主義の発展の中で『天才』と見なされた人々の『偉大さ』は何に由来していたのでしょうか」とあるが、芸術家の偉大さは何に由来していたのか。五十字以内（句読点なども字数に含む）で答えなさい。

国語（その五）

問三 傍線部**C**「いまだに『コピー』として一顧だにされません」とあるが、それはなぜか。その理由を説明した次の文の空欄に入れるのに最も適切なものを、本文中から六字で抜き出して答えなさい。

［　　］に触れていないから。

問四 空欄**イ**に入れるのに最も適切なものを、次の①～⑤のうちから一つ選び、番号で答えなさい。

① イデオロギー　② コスモロジー　③ イデア
④ プロパガンダ　⑤ パラダイム

問五 傍線部**D**「自然を生まれたものとしてではなく生むものそれ自体として理解する」とあるが、それはどういうことか。その説明として最も適切なものを、次の①～⑤のうちから一つ選び、番号で答えなさい。

① 自然を価値あるものとして生まれたと理解するのではなく、価値を付与するものとして自然を理解するということ。
② 自然に創造主である神が宿っていると理解するのではなく、自然には芸術の源泉が潜んでいると理解するということ。
③ 自然にオリジナリティがあると理解するのではなく、オリジナリティを発揮するものとして自然を理解するということ。
④ 自然を創造されたものとして理解するのではなく、自然は人間により模倣されたものであるとして理解するということ。
⑤ 自然を神の被造物として理解するのではなく、自然自体に新しいものを産出する能力があると理解するということ。

国語（その六）

問六 [X] に入る、次の**ア**～**エ**の四つの文を正しく並べたものとして、最も適切なものを、後の①～⑤のうちから一つ選び、番号で答えなさい。

ア 芸術は、そこで「自然」がもつ「生む力」を模倣するものと考えられるようになったのです。

イ 自然自体にそのような「オリジナリティ」があるとすれば、「自然の模倣」を試みる芸術家にも「オリジナリティ」を発揮する能力が少なくとも潜在的には与えられていることになります。

ウ 人間もまた「自然」の一部だからです。

エ シュレーゲルはこうして「芸術＝自然の模倣」という旧来の考え方を、オリジナリティの源泉を示すものへと転換させることに成功しました。

① **ア→イ→ウ→エ**　② **ア→イ→エ→ウ**　③ **ア→ウ→イ→エ**
④ **イ→ア→エ→ウ**　⑤ **イ→ウ→エ→ア**

問七 本文の内容と合致するものを、次の①～⑤のうちから一つ選び、番号で答えなさい。

① 芸術家は創造する能力をもっていたために、絶対的な権威をもつ唯一神と比肩する存在として見なされていた。

② 芸術作品の価値は、従来は神が創造した物事の真の姿を可能な限り正確に模倣することに、求められていた。

③ コピーではなくオリジナリティがある作品を生み出すためには、苦悩や葛藤に勝つだけの意志力が必要である。

④ シュレーゲルは自然の概念を読み替えて人間にオリジナリティをもたらしたが、それは彼独自の考えである。

⑤ 資本主義社会は「大きな物語」を共有し、道徳的な正しさや教養を身につけ理想的な人格を形成しようとした。

国語（その七）

第二問

次の文章を読んで、後の問に答えなさい。

教育界や一般社会でもですが、「教える」と「学ぶ」の区別とそれらの関係が未整理なのではないかと感じることが結構あります。「教えたのにちっともわかっていない」とか、「自分で課題を見つけて探求させれば、興味に応じて自主的に学習すると思って自由に選択させたのに、［イ］に活動しない」といった発言をよく耳にします。こういう発言に悪気はないのでしょうが、Aどうもどこかがおかしいように思います。

学習主体と教えている人物は別の存在です。学習主体の外にいる人物が教えるという行動をしたのですが、意図した学習を学習主体がしていないと言ってるわけです。行為の主体が別なのですから、「教える」＝「学ぶ」という関係が、成立しないのは当然なのではないかと思います。それなのに「教えた」のに「学んでいない」と言ってるわけです。【Ⅰ】どう考えればいいのでしょうか。

「学習はある特性を持った主体がある状況に置かれた時に生じる特定のものである」という見方をするようになって、「教える」ということと「学ぶ」ということについても多少理解が進んだように思います。当たり前ですが学習主体が学習するのであって、外側にいる人間がその学習に直接タッチするわけにはいきません。【Ⅱ】それでは為す術がないと思われるかもしれませんが、外側にいる人間は学習主体の置かれている状況設定に関与することによって、学習主体の学習に影響を及ぼすことができるのです。

学習者の学習の種類というか、学習の仕方に他者が影響を与えることは可能です。あまり良い例ではないのですが、実験結果がハッキリしているので挙げることにします。

実験はこういうものです。学生に後で行うテストの形式を告知します。半分には再生テスト（選択肢がなく自分で記述するテスト）を行うと、半分には再認テスト（選択肢を選ぶテスト）を行うと、告知します。そして再生テストを行うと告知したグループの半分には、告知通り再生テストを行い、半分には告知したのとは異なる再認テストを行いました。再認テストを行うと告知したグループにも同様のことを行います。

その結果は①メイリョウで、告知された形式のテストを受けた学生は成績が良く、告知された形式と異なるテストを受けた学生は成績が悪いというものでした。告知されたテスト形式によって彼らの学習の様式が変化したであろうと容易に想像がつきます。【Ⅲ】

再生テストは記述式ですから、細かく正確に学習する必要があります。しかし、そのぶん広範囲にわたって学習が行き届きにくくなる可能性があります。再認テストを告知された場合には、選択肢がありそれらの区別ができる程度の学習でよいのですから、それぞれの学習は薄くなるでしょうが、そのぶん広範囲をカバーすることが可能だったに

国語（その八）

違いありません。

このように、学習者たちにして欲しい学習のやり方に、[B]外側から影響を与えることは可能です。しかし、学習者は学習者なりの経験や姿勢を持っているわけで、それを通じてしか外からのものは受け取りません。したがって、影響を与えられると言っても学習者を直接コントロールできるわけではありません。

ですから、教えるサイドは学習者に望ましい学習が起きるように条件整備をし、それが学習者に起きているかどうかを用心深く観察しなければならないのです。【Ⅳ】教える立場の者はともすれば、自分が直接学習者に教えているように考えがちですし、教えたことを学習者がそのまま学習しているとも思いがちです。しかし、そうではないのです。判断基準は学習者が学習しているかどうかであって、どう教えたかの問題ではないのです。

先に「教えたのにちっともわかっていない」とか、「自分で課題を見つけて探求させれば、興味に応じて自主的に学習すると思って自由に選択させたのに、［イ］に活動しない」といった発言はどこかがおかしいと言いましたが、この点がおかしいのだと思います。学習主体の外側にあって教える立場にある人間が変更②カイゼンできるものは、教え方といったものも含めてすべて学習主体の外側の条件なのです。学習主体を直接に変えることはできません。

学習主体が「教えたのにちっともわかっていない」のであれば、こちらの「教え方」を変える以外に選択すべき手段はありません。相手が「わかっていない」と言ってみても[C]天に唾するようなものです。

また、「問題解決学習」は、子どもたちが自分で問題を見つけてそれの解決を図るというものですから、子どもたちの学習意欲や活発な活動が保証されると見なされて、教育現場では多用されます。しかし、その領域に関する知識がかなりなければ、解決したい問題点など見つかるわけがありません。【Ⅴ】それに、こう考えてはどうだろうといった探索を導く仮説も、その領域の知識がかなりなければなりません。うまくいっていないのに、それでも「問題解決学習」をやらせて、どうも「うちの子どもたちは積極性がなくて……」なんていうのを聞くと、［ロ］だと思います。子どもたちの学習を見なければダメなのです。

学習者の学習を基準にして、教え方の評価や工夫を考えなければならないのです。その工夫のひとつとしてシステム化された知識形態が有望なのではないかと思います。「③セイチ化」の効果も期待できますし、疑問や推測もしやすくなる可能性が高くなるからです。

国語（その九）

ただ、これらの効用を期待できるためには、教える立場の者の知識が十分にシステム化されている必要があり、学習者にある程度の基礎知識があることが前提になります。学習者の条件を④コウリョしながら、知識システムの有効性を生かしたいものだと思います。

（西林克彦（かつひこ）『知ってるつもり　「問題発見力」を高める「知識システム」の作り方』による）

西林克彦『知ってるつもり』／光文社

※　問題作成上の都合で、原文の一部に手を加えてあります。

問一　傍線部①～④のカタカナを漢字で書きなさい。

問二　空欄**イ**に入れるのに最も適切なものを、次の①～⑤のうちから一つ選び、番号で答えなさい。

①　理性的　②　意欲的　③　効率的　④　即興的　⑤　民主的

問三　傍線部A「どうもどこかがおかしいように思います」とあるが、どういうところがおかしいのか。その説明として最も適切なものを、次の①～⑤のうちから一つ選び、番号で答えなさい。

①　学習主体の外にいる人間は学習主体に影響を与えることなどできないのに、それが可能であると錯覚しているところ。

②　学習主体に問題があるわけではなく、教えている人間に人格的な問題があるのに、そのことに気づいていないところ。

③　学習主体の外にいる人間が学習主体に教えているのに、学習主体の外にいる人間が学習していると勘違いしているところ。

④　教えている人物が意図している学習が本当は正しいものではないのに、正しいと疑うことなく信じ込んでいるところ。

⑤　教える立場の者が教えたことを学習者がそのまま学習しているわけではないのに、そのように思い込んでいるところ。

国語（その十）

問四 傍線部B「外側から影響を与えることは可能です」とあるが、どのようにすることでそれが可能になるのか。本文中から二十二字で抜き出して答えなさい。

問五 傍線部**C**「天に唾する」とあるが、この言葉の意味として最も適切なものを、次の①～⑤のうちから一つ選び、番号で答えなさい。

① 他者を馬鹿にしようとして、他者のすばらしさに気づくということ。
② 他者に害を与えようとして、かえって自分が被害を受けるということ。
③ 他者の振る舞いを見ることで、自分の振る舞いを見直すということ。
④ 他者の欠点をあげつらっても、他者は何ら変わることはないということ。
⑤ 他者を批判したところで、自分には何の利得にもならないということ。

問六 次の一文を挿入する場所として、最も適切なものを、後の①～⑤のうちから一つ選び、番号で答えなさい。

こういう考え方をすると、必ず学習者サイドに問題があるということになります。

① 【Ⅰ】 ② 【Ⅱ】 ③ 【Ⅲ】 ④ 【Ⅳ】 ⑤ 【Ⅴ】

問七 空欄**ロ**に入れるのに最も適切なものを、次の①～⑤のうちから一つ選び、番号で答えなさい。

① 人権蹂躙（じゅうりん） ② 失礼千万 ③ 本末転倒
④ 自家撞（どう）着 ⑤ 自縄自縛

国語（その十一）

問八 本文の内容と合致するものを、次の①～⑤のうちから一つ選び、番号で答えなさい。

① 教える立場の者は学習者に望ましい学習が起きるように、学習主体とのあいだに良好な関係を構築する必要がある。

② 再生テストと再認テストでは学習の仕方が異なっているので、両者を比較しても学習効果をはかることはできない。

③ 「問題解決学習」を安易に導入しても学習効果は上がらないので、学習者を観察し教え方の工夫をしなければならない。

④ 学習者にある程度の基礎知識がなければ学習効果が上がらないので、とにかくまず知識を蓄積しなければならない。

⑤ 教えることと学ぶことは本来区別すべきであるのに、教育界を除いた一般社会ではそれが十分に認識されていない。

国語（その十二）

第三問 次の文章を読んで、後の問に答えなさい。

人間は物語の中を生きているのであり、人間の営みはすべて、物語が関わってくるがゆえに、人間は物語とともに「物語る技術」も発達させてきました。

ビジネスもまた、当然ながら人間の営みであり、それがゆえに、ビジネスにおいてもA ストーリーテリングを軽視することはできません。

楠木建（くすのき）『ストーリーとしての競争戦略』を紐解（ひも）いてみましょう。同書では次のように、ストーリーテリングを「動画」のイメージで説明します。

> 個別の違いをバラバラに打ち出すだけでは戦略になりません。それらがつながり、組み合わさり、相互作用する中で、初めて長期利益が実現されます。ストーリーとしての競争戦略は、さまざまな打ち手を互いに結びつけ、顧客へのユニークな価値提供とその結果として生まれる利益に向かって駆動していく論理に注目します。［イ］、個別の要素について意思決定しアクションをとるだけでなく、そうした要素の間にどのような因果関係や相互作用があるのかを重視する視点です。
>
> 戦略をストーリーとして語るということは、「個別の要素がなぜ齟齬（そご）なく連動し、全体としてなぜ事業を駆動するのか」を説明するということです。それはまた、「なぜその事業が競争の中で他社が達成できない価値を生み出すのか」「なぜ利益をもたらすのか」を説明することでもあります。個々の打ち手は「静止画」にすぎません。個別の違いが因果論理で①ジュウオウにつながったとき、戦略は「動画」になります。ストーリーとしての競争戦略は、動画のレベルで他社との違いをつくろうという戦略思考です。

ビジネスにまつわるあらゆる要素が連結し、メカニズムを形成していること。静的ではなく動的で、断片的ではなく連続的であること。さらに言えば、それが「当たり前」のものではなく、「意外性」をもったものであるということ。

ＳＦ作家としての、［ロ］コンサルタントとしてのわたしの経験上、②スグれたストーリーとは、次の条件を満たすものです。

・条件１　新規性：語られている内容に新しさ、意外性はあるか。
・条件２　共感性：語りのうちに、感情的な表現や、リアリティがあるか。
・条件３　構築性：すべての要素が［ハ］に連動し、一つの世界観を生んでいるか。

国語（その十三）

・条件４　論理性：展開は適切か。また、展開にムリ・ムラ・ムダはないか。

[B]デザイナーはストーリーを「共感」の道具として使い、ＳＦ作家はストーリーを「思弁」として使い、コンサルタントはストーリーを「競争戦略」として使います。

いずれにおいても共通するのは「論理性」であり、何よりもまず求められるのは、語りとしての適切な展開ですが、「思弁」として、あるいは「競争戦略」として語られる際には「新しさや意外性」が必要になります。また、「共感」の道具として求められるのは言うまでもなく「共感性」であり、「人の感情に寄り③ソった、リアリティのある表現」が必要となります。最後に「思弁」としてのＳＦのビジョンと「競争戦略」としてのビジネスのビジョンに共通するのは、それらがアートであり、再現性を持たないということです。

そうした性質と分かちがたく存在する条件が、「構築性」です。思考を詰め、細部を描画していくと、構築性は増し、「思弁」としても「競争戦略」としてもリアルなものとなり、同時に、唯一無二のものとなっていきますが、唯一無二であるということは、再現もできないということです。

そう、スグれたストーリーとは、固有のものであり、再現性がないものであり、再現性がないものであるために、ある書き方をすれば必ず思った通りのものが書ける、というような、法則性に依存するものではないのです。

楠木健は書いています。

法則とは、どこでも成り立つ、どんな文脈でも再現可能な[c]一般性の高い因果関係を意味しています。自然科学であれば、たとえば「この材料を使うとこの温度でも高温超電導が可能になる」という一般法則は成立します。そうした自然現象の法則を求め、法則を定立しようとするのが科学の基本スタンスです。

ところが、その種の法則は、幸か不幸か（たぶん「幸」のほうだと思いますが）、戦略論の対象にはなりえません。経営や戦略は「科学」ではないからです。小売業界でとてもうまくいった施策を鉄鋼業界にそのまま持ち込んでも、うまくいくとは限りません。かえって変なことになるかもしれません。同じ業界であったとしても、ある会社でうまくいったやり方であっても、他の会社で全く効果がないということはごく普通にある話です。

「理屈二割の気合八割」、もしそんな普遍の法則があったら、成功要因の一〇割を理屈で説明できてしまいます。本当に一般性の高い法則があれば、その法則を取り入れ

国語（その十四）

て、それに従ってやっていればうまくいくのですから、経営などそもそも必要なくなります。「こうやったら業績が上がる」という法則は、大変に魅力的に聞こえるのですが、こと経営に限っていえば、そうした主張はどこまでいっても嘘なのです。

経営学は科学になることを求めて発展してきており、また、実際のビジネスも科学的であろうとする方向で発展してきていますが、実際のところ、ビジネスと科学はそれほど相性がいいものではなく、ビジネスの④コンカンまでを科学に置き換えることはできません（むろん、科学と相性のいい側面もあります。しかし、それはビジネスのある一部分であって、ビジネスのすべてが科学に置き換えられるわけではありません）。そういう意味ではビジネスとは、ある種のアートなのです。

（樋口恭介『未来は予測するものではなく創造するものである　考える自由を取り戻すための〈ＳＦ思考〉』による）

※　問題作成上の都合で、原文の一部に手を加えてあります。

問一　傍線部①～④のカタカナを漢字で書きなさい。

問二　傍線部Ａ「ストーリーテリング」とあるが、これによってどのようなことができるのか。その説明として最も適切なものを、次の①～⑤のうちから一つ選び、番号で答えなさい。

① 静止画では伝えることができない商品の魅力を、動画を用いて個別の要素を結びつけることにより示すことができる。

② たとえ個別の要素には魅力がなくても、うまくそれらをつなげることによって、価値あるように見せることができる。

③ 他社が達成できない価値を生み出し、利益を上げることが、なぜできるのかを、説得力をもって示すことができる。

④ 当たり前のものではなく意外性をアピールすることによって、理性では捉えきれないもので人々の心を動かすことができる。

⑤ 断片的に情報を集めるだけでなく、一定の量を集め、うまく組み合わせることにより人々を圧倒することができる。

国語（その十五）

問三 空欄**イ**、**ロ**に入れるのに最も適切なものを、次の①～⑤のうちから、それぞれ一つずつ選び、番号で答えなさい。

① まして　② そして　③ むしろ　④ つまり　⑤ ただし

問四 空欄ハに入れるのに最も適切なものを、次の①～⑤のうちから一つ選び、番号で答えなさい。

① 還元的　② 所与的　③ 自律的　④ 恣意的　⑤ 有機的

問五 傍線部**B**「デザイナーはストーリーを『共感』の道具として使い、ＳＦ作家はストーリーを『思弁』として使い、コンサルタントはストーリーを『競争戦略』として使います」とあるが、なぜストーリーを使うのか。その理由を説明した次の文の空欄に入れるのに最も適切なものを、本文中から十三字で抜き出して答えなさい。

［　　］から。

問六 傍線部**C**「一般性」とあるが、この言葉の対義語は何か。次の空欄に入れるのに最も適切なものを、本文中から二字で抜き出して答えなさい。

［　　］性

問七 傍線部**D**「ビジネスとは、ある種のアートなのです」とあるが、なぜこのように言えるのか。その理由を説明した次の文の空欄に入れるのに最も適切なものを、本文中から八字で抜き出して答えなさい。

［　　］から。

国語（その十六）

問八 本文の内容と合致するものを、次の①～⑤のうちから一つ選び、番号で答えなさい。

① ビジネスは利益を上げることが第一義であり、そのためには会社のイメージを高めることが大切である。

② ビジネスは経営学に基づいて行われるが、それは科学ではなく人の心を動かす文学としての側面が強い。

③ ビジネスは結果やプロセスを数字によって全てあらわすことができず、科学と折り合いが全くつかない。

④ ビジネスは全てを科学で代替できず、決まりきった論理による法則ではなく、ストーリーが必要である。

⑤ ビジネスはアートのように非常に魅力的なものであり、人間が生きていく上で重要な分野の一つである。